

阮攸（グエン・ズー）と馬琴 —二つの作品をめぐって—

川口健一（東京外国語大学）

【キーワード】 グエン・ズー、曲亭馬琴、金雲翹、風俗金魚伝

はじめに

ベトナムの文学作品に阮攸（グエン・ズー）という文人の『金雲翹新伝』がある。ベトナム人のよく知る作品で、一般には単に『翹伝』（チュエン・キエウ）あるいは「新伝」を略して『金雲翹』の名で親しまれている。字喃（チュ・ノム）と呼ばれる漢字応用の独特な文字と漢字の混交文でしかも古典形式の六・八体（六音と八音を押韻しながら交互に繰り返す文芸形式のひとつ）で綴られたこの作品は、作者阮攸の文学創作能力が高度に発揮されたものであるが、彼の創作ではない。中国文学に青心才人なる文人による『金雲翹伝』という作品があり、阮攸の『金雲翹新伝』はこれを踏まえたものであるからである。

一方、青心才人の作品は江戸時代の日本に舶載され、『通俗金翹伝』として翻訳出版される。さらに馬琴は『風俗金魚伝』なる翻案物を上梓する。

これらの作品のうち、ここでは主に阮攸『金雲翹新伝』（以下、『翹伝』の書名を用いる）と馬琴『風俗金魚伝』をめぐって若干の比較を試みたい。なお、この報告は書誌学的な考察をねらいとするものではないことを初めにおことわりしておきたい。

1. 青心才人『金雲翹伝』の受容

『金雲翹伝』の作者青心才人については未詳である。実名ではなく、他に青心才子とも呼ばれる。この物語の成立時期についても、17世紀明末あるいは清初とされるだけで、中国文学史にも名が出ない。この作品の女性主人公王翠翹と賊将徐海が登場する他の物語に茅坤（1512-1601）の「紀勦徐海本末」がある。また、余懷の「王翠翹伝」なる物語が張潮編『虞初新志』に見えるが、これは清朝康熙39年（1700）に世に出た。これらの作品の比較検討は今後の課題である。

ベトナムの文人阮攸（1765-1820）が青心才人の白話小説『金雲翹伝』を3254行からなる六・八体の韻文詩物語『翹伝』に綴り変え、いつ世に出したかについても定説はない。18世紀末あるいは19世紀初めとされるだけである。今日この原作は存在しない。残存する最古の版は、嗣徳24年（1871）河内（ハノイ）柳文堂蔵版で、パリ極東学院に所蔵されている。

阮攸について略歴を記すと、生地は不詳で、父親阮儼（グエン・ギエム、1707-75）の故

郷が河静省宜春県僊田村であるところから一般に僊田阮侯と呼ばれる。以下に簡単な年譜とその他の作品を掲げる。

1784年 秀才試験に合格（三場）、官途につく。

1789年 黎朝滅亡、隠逸の生活を送る。1802年に興った阮朝嘉隆（ザー・ロン）帝の懇請を受け、出仕する。

1805年 東閣大学士

1813年 勤政殿学士、正使として中国に赴く。

1814年 礼部右参知

1820年 明命（ミン・マン）帝の命を受け、再度中国に赴く前に病を得て逝去。

【他の作品】

[漢詩]

『清軒前後集』、『南中雜吟』、『北行詩集』、『黎季紀事』

[字喃]

『衆生十類祭文』、『帽坊青年托辞』、『活祭布坊少女文』、『樵夫伸冤歌』

青心才人『金雲翹伝』が日本に舶載されるのは江戸宝暦年間（1751-63）のことであり、宝暦13年（1763）に西田維則（？-1765）による和訳本『通俗金翹伝』（正式書名『繡像通俗金翹伝』）が刊行される。西田維則については詳しい履歴はわからないが、石崎又造の書物に次の記述が見える。

「著述は奚疑齋風月堂の跋文によれば、巻頭に「口木子」とあるが、本名は西田維則といひ近江の人、奚疑齋の友人で明和二年没したと云ふ。按ずるに白駒の門人ではあるまいか。」（石崎又造 [1940：152]）

曲亭馬琴（1767-1848）による翻案『風俗金魚伝』は全五巻からなり、第一～第四編が文政12年（1829）、第五編（校訂）が天保12年（1839）の板行とされる。（板行時期については、当日のシンポジウムにおいて発表者のひとり神田正行氏から疑義が出された。）

『風俗金魚伝』板行の経緯について、馬琴は以下のように述べている。

「書賈錦林堂、頃又余に請うことあり、且いへらく、近曾清人の著しつる金翹傳は、天朝寶曆癸未の歳に、通俗譯文の一書世に出しあり、視聽に熟したり、然れとも、閩門竹馬の間には猶いまた行われず、□□せしもの和文を克せず只原文に縛縛せられて、己か物とせざればなり、こも傾城水滸の如く、胎を奪ひ骨を換え、本邦の事に綴易て、新しうし給ひね、小人得て鏤まく欲す、願ふは許容給へといへり、其謂ふよしの理りあれば、這冊子をなん作りたる、さばれ彼金翹傳は淫風を宣て時候に媚び、佳人を傷損して、欲を導く者に似たりこゝをもて、余が意に愜さること多かり、畜二十回の結局に至て、因を推し果を談じ、勸懲警誡叮寧、よく迷津の筏となせり、こは泛々、なる、作者の及ぶべきにあらねども、彼翠翹が意志は、則作者の心にして、婦女子の情にあらずかし、これも亦世の才女の、才を負み貌に誇て、遂に其身を愆つものを、警にせん為なる歟、そ

はとまれかくもあれ、始に劉談仙の示幻あり、終に三合道姑の神通あり、余がその故轍を補ふて、更に一兎園を開く所以、一部の要領こゝにあり、惜しいか彼が説くところ、疎鹵なるものいと多く、諄々しきも少からず今繁を芟て足らざるを補ひ、和漢其差ある者と、言猥褻に過ぎたるは、綴り易へたるも多かめるを、彼書と合し覽るに非ずば、何人かよくこれを評せん勞して功のなきものなる、兒戯の冊子の稗蒔に、彼の井田の故実を説かず、浅瀬を山跡もろこし殻の橋の下ゆく金魚傳、金翹傳の秀句に似たるも、金重魚子が名にし負ふ、盆池の金魚の話説を、巻端に見はして、胸算を合するのみ、

文政十二年己丑春正月吉日新版

曲亭馬琴……」(『風俗金魚傳』第壹編序)

(注：錦林堂は錦森堂の間違い)

2. 作品の比較

1) 物語構成

『翹伝』と『風俗金魚伝』の構成を対照させると以下のようなになる。

主要地名	主要人物
(『翹伝』) (『風俗金魚伝』)	(『翹伝』) (『風俗金魚伝』)
北京 → 津の国難波村	金重 → 庭井金重郎
遼陽 → 鎌倉	王松 → 船尾鱗蔵
臨清 → 赤穂	(母) → 水草
臨淄 → 赤間ヶ関	翠翹 → 魚子
無錫 → 赤穂	観 → 鱒二郎
台州 → 鎌倉大磯	翠雲 → 乙魚
杭州 → 銚子浜辺	劉淡仙 → 高津の地獄
錢塘江 → 潮来	馬監生 → 小山の廻四郎
	秀婆 → 縁起増屋の撫牛
	楚卿 → 小幡此四郎
	東其心 → 錫梨東太郎
	宦姐 → 加古主馬之進娘鶉橋
	覚縁 → 覚縁
	薄婆 → 蚊摺取の加勢木
	薄倅 → 足懸屋鴟八
	徐海 → 氏がみ大尽、実は下野太郎氏武
	胡宗憲 → 管領扇谷朝興

人物に関して、母親は青心才人『金雲翹伝』では何氏であるが、『翹伝』では具体名は出てこない。3姉弟の順序は、原作では翠雲、『翹伝』では王観がそれぞれ末子である。

物語の展開にともなう主人公の場所の移動を図示すると以下のようなになる。

重と形だけの結婚をする。金重の正式の妻はもちろん翠雲である。こうして3人がひとつ屋根の下で幸せな生活を送ることが語られて物語の幕となる。『翹伝』にはこのような結末を前もって暗示するような箇所がないため、読者は唐突な感を抱くのである。しかし、青心才人の原作にはこの結末を暗示する箇所が見られる。それは、金重と王家の姉妹が初めて出会う場面である。清明節で春の野遊びに出かけた3姉弟が淡仙の墓の前で立ち止まり、語り合っていると遠方から金重がやって来る。王観とは学友という設定であるが、金重は初めて翠翹、翠雲と出会い、姉妹にすっかり魅了されてしまう。

翠翹の眉は細長く、目は玉のようにきらきら輝き、顔立ちは秋水のようで、肌は桃花のようであった。翠雲は精神が落ち着き、行儀正しく、美しさは表現できないほどであった。金生はその美貌のために魂が奪われた。彼は心のなかで誓った。「もし姉妹を娶ることを得ずば、一生娶るまい」。

(原文：翠翹眉細而長、眼光而溜、容如秋水、色似桃花、翠雲精神靜正容莊、別有丰采、難以模擬、金生神為色奪、暗暗魂消、道這相思索害也、又暗暗立誓、道我不得二女為妻、終身不娶、)

これに相当する箇所は、『翹伝』ではたった二行の表現で済まされている。

幸いなるかな邂逅し 鬪草の會にて花探せり
紅影見たり垣間より 春蘭、秋菊、相競ふ
(159行～162行)

ちなみに、和訳本『通俗金翹伝』では次のように訳されている。

姐ト云ヒ妹ト云ヒ聞くシニマサル標致ナリ、我モシコノ二人ノ女ヲ妻トナサズンバー生
老婆ハモツマジト、

上記文中、「標致」にはキリヤウ、「老婆」にはニョウボウのルビが振られている。
馬琴『風俗金魚伝』ではこうなっている。

心の内に思ふ様、魚子は浪華一番なる、美人なりとは兼て聞しに、猶も優れる處女なり、
たま〜男と生れしかひに、斯る婦女を妻とせば、王公貴人の聳君に、なり昇るより楽
かりなん、

原作、和訳に認められるように、金重は初めての出会いで翠翹、翠雲の姉妹を妻にしたいと心に誓う。そして、妻翠雲がいるにもかかわらず、名のみではあるが翠翹をも妻としてハッピーエンドで物語は終わる。原作に登場する賊将徐海は実在の人物であり、ふたりの愛妾がいたことが知られている。当時の婚姻制度を考えあわせれば、原作のこのような展開は特に不自然なことではないのかもしれない。だが、阮攸は暗示はどこにもおかずに、この結末で

物語を結んでいる。結末の唐突さにこのことが関係しているように思われる。

『風俗金魚伝』では、金重郎は魚子と仲睦まじくなった後、「若し縁談調ずば、吾も一生妻を娶て独身暮さんのみ」と思い込むが、結末はこうならず、妹乙魚と結婚する。再会後の魚子は金重郎をはじめ、男を寄せ付けず、妙龍尼として草庵に住み、徳を積み、90余歳で大往生を遂げたとして物語が結ばれる。

3) 物語の思想

阮攸『翹伝』には彼の人生観が託されている。人の力ではどうにもならない天の命令、すなわち天命と人の徳心が中心の思想と言える。徳心は儒教倫理にかかわる。仏教の因果応報の考えや宿命論ももちろん認められる。

彼は、才能と運命は相妬むとする才名相妬の考えを最初に提示し、才能豊かな佳人が天から妬まれ、薄命に追い込まれても特に不思議ではないと前口上を述べてこの物語を始める。また物語結末でも、人は天命に従わなければならないが、前世の業を負っているのだから天を恨んではいけない。大切なのは、人の心であり、善根が心があれば、その心は天地人の三才にも等しいのである。しかし、才があってもそれに恃んではいけない、才と災は同じ韻であるからと説いてこの物語を閉じる。

萬事は天に歸するを顧て 人の運命と思ふべし
 風塵必ずこれ風塵 清高の人のみ清高なり
 天帝人に偏愛なく 才命二字は満ち溢る
 恃むべからず才ありと 一韻なるは才と災
 すでに業をば身に負へば 責むべからず天帝を
 善根心にあるなれば 心は等しき三才と
 (3240行～3252行)

物語の思想に関して、特に重要な作中人物は三合道姑であろう。彼女は予言者の能力を備えており、翠翹の人生を覚縁に告げ知らせる。物語後半で翠翹は錢塘江に身を投げる。三合はこれを予知した上で翠翹についての覚縁の質問に答える。

禍福は天の道 根源また人心より出づ
 天有り而して吾人在り 修は福にて情冤なり
 翠翹、怜悯の女なるに 無縁は紅顔の運命なり
 且つまた情の一字にて 我と我が身を縛りたり
 故に安楽の場あるに 久しく留まることぞなき
 魔鬼に誘はれたるに 斷腸の道をば尋ねけり
 一難去ればまた一難 青樓青衣の二度勤め
 槍抜刀に囲まれて 虎狼に背を寄せ侍女となる
 波騒がしき水流に 孤單の身を投げ魚龍の前
 情ある故の其冤は 知るは、ただただ己のみ

自ら生死に苦しみて 終れり断腸の生涯を
(2655行～2676行)

三合が説き告げる翠翹の人生は作者阮攸の人生観に他ならない。

覚縁は三合のお告げを受け、この後漁師を雇い銭塘江に網を張って待ち受け、翠翹を救助する。

上記の三合の言葉は原作では以下のように表現されている。

およそ世間の人は徳を修めれば福を享け、情にからまれば苦悩を身に受けるのです。翠翹は情愛のために、苦境に陥りました。金屋の地に久しく留まらず、断腸の道に絶えず踏み入ったのです。二度青楼の苦をかり、青衣の罪を深くし、槍刀のなかに身をおき、虎狼の魔君に背を接し、波浪のなかで魚龍の餌となりました。辛苦をなめ尽くしたので冤債を返し終えたのです。

(原文：大凡人生世間、福必徳修、苦因情受、翠翹因為情愛、遂成苦境、是以金屋之地、不敢久留、断腸之天、往往促駕、烟花債苦受兩番、青衣罪深經一案、刀兵内伴、虎狼之魔君、波浪中作魚龍之寢食、方能消化劫数、)

[一部、同義の別字を充てた]

ちなみに、『通俗金翹伝』ではわずか以下の訳文のみである。

他一旦ノ情ニ迷ヒ、数他ノ苦患ヲウクルトイヘドモ、

また、『風俗金魚伝』には三合に当たる人物が設定されていないため、覚縁とのやりとりは存在しない。勸善懲悪を旨とするこの翻案は馬琴の力量が巧みに発揮された作品であるが、思想的な深みの点では『翹伝』に及ばない。

韻文3254行からなる『翹伝』はベトナム語の流麗な調べと格調高く語る阮攸の人生観が相俟って、この作品の芸術的価値を高めている。

3. 作品の評価

阮攸『翹伝』について

阮攸『翹伝』は芸術性と文学的価値をもつ作品である。それは3点に見出される。

(1)ベトナム語の格調の高さ

阮攸は六・八体の簡潔な韻文により律動的に物語を展開する。文体に関して、この格調の高さが物語に芸術性を付与している。

(2)詩の言葉によるイメージの豊穡さ

『翹伝』は韻文叙事詩による物語であるため、白話小説『金雲翹伝』のような直線的な

筋運びはない。そのかわり、詩の言葉のもつイメージ喚起力を支えとしてこの物語は豊かな心象の世界を作り出している。

(3) 阮攸の思想

すでに述べたように、この物語には作者阮攸の人生観が語られており、通俗性を越えた純文学的な物語になっている。

簡単にまとめるとこのような評価になるが、今後さらに考察を深めていきたい。

参考までに、封建社会と人間の生存権の視点からこの物語を捉える現代ベトナムの評価を以下に掲げる。

物語の始まり方と終わり方に依拠すると、『翹伝』はテーマ小説であるかのような感想を容易に抱かせる。グエン・ズーは儒教の才命相妬説を証明するために『翹伝』を書いたかのようなのである。だが、作品の形象内容の実質に深く入り込むと、『翹伝』において提起された基本的問題は衰頹のただなかにあった封建社会と人間の、主には女性の生存権との間の矛盾の問題であることがわかるであろう。才命相妬説はその社会的問題に関する詩人の偏った認識にすぎないのであり、そのことは主として作者の副題的性質を帯びる論評、解釈の言葉を通して存在する。『翹伝』のなかの翠翹は社会のいずれか一部の人々の代表なのではなく、人間の美しさ、精華であるすべてのものを代表し、象徴する人物の性格をもっている。（一部略）普通は局所あるいは個別的な性質を有する角度から社会問題を眺めた、同時代の多くの作品とは異なり、『翹伝』においてグエン・ズーは真実で本質的な様相のもとに社会問題を提示した。翠翹を踏みこむ勢力は、現実の社会的勢力を代表する性格を何らかの程度もっており、また、さらに注意するに値することはその勢力は個別的に作用するのではなく、相互に連結してひとつの勢力を形成するということである。この理由で、『翹伝』のなかで提起された問題の実質はグエン・ズーが制度というものがどのようなものか知らなかったとしても、制度の問題なのであると述べた研究者がいる。『翹伝』において、グエン・ズーは社会の不合理、不公平なるものすべてを人間の側に立って非難する。詩人の非難の言葉は、時に鋭く激烈であり、時に悲痛で辛辣である。詩による物語形式の伝統的な構成に従い、作品中で金重が回帰する段は人生で多くを失った善なる人々に対する償いの精神を示す段落であり、作者の筆先からは非難の精神がにじみ出ており、やはりひとつの「告発状」なのである。しかしながら、『翹伝』はその告発的内容のために、元来作者の長所である、きわめて濃密な抒情的特質を完全に埋没させてはいない。『翹伝』においてグエン・ズーは人倫の苛酷な社会にあって自由、純朴で清純な男女の愛についての高尚な願望を体現し得ており、また不公平で拘束的な社会の公理と自由に関する激しい願望を体現し得ている。翠翹と金重の美しい愛は男女の情愛に関する不滅の歌詞である。それは、甘美で安らかな感覚ばかりでなく、人生がどれほど厳しくても人間の本質は愛慕の地平線に向かう堅実な信心を人間にもたらす。『翹伝』で輝く星のように現れ、薄情でずる賢い類の暗い影を消し去る徐海のイメージは道理、公平を讃える英雄歌である。グエン・ズーは、その社会にがんとしてひとり立ち向かう徐海という人物をつくった時、大胆で空想豊かであった。

徐海は楽々と戦いに勝った。グエン・ズーは、人間は公理と自由への渴望を抱くなら、決して妥協しないということを万世に語りかけるために、徐海の信じやすく軽率な死を不動の像のごとく死んでも立っているイメージによって救ったのである。

(『文学辞典』第2巻、ハノイ、1984年、456-457頁)

馬琴『風俗金魚伝』について

『風俗金魚伝』は七五調の美文体による物語で読本作者馬琴の力量が遺憾なく発揮された作品である。

勧善懲悪を旨とするこの翻案読本は江戸の大衆を相手に書かれたものである。先にも述べたが、青心才人『金雲翹伝』の作中人物三合道姑に当たる人物は『風俗金魚伝』には出てこない。予言者の能力をもち、宿業を語る三合は馬琴にとって不要の人物であったのかもしれない。かわりに、馬琴は禅尼覚縁に三合道姑の役割を合わせ与えているように読み取れる。物語大尾で、魚子は覚縁が観世音の権化であったことを夢に覚る。これは馬琴の創意であり、原作の覚縁は単なる尼僧にすぎない。『風俗金魚伝』序に「疎鹵なるものいと多く、諄々しきも少からず今繁を芟て足らざるを補ひ、」とあるが、三合道姑省略はこのことに関わっているように思われる。

『風俗金魚伝』は勧善懲悪の読本としてよくできた作品であるが、今日の読者にとってやや物足りなさを感じさせるのは、思想が弱いためであろうか。大衆文学としての読本にこのことを求めるのは意味のないことを承知の上で敢えて述べてみた。

青心才人『金雲翹伝』について

この作品の評価は今後の課題としたい。

参考まで、現代中国での評価を以下に掲げる。

芸術としての『金雲翹伝』は、出色の出来映えである小説とは言えないものの、明清の人情小説の中で、最もひどい出来の作品ということは決して無い。逆に、作品の構成や表現、キャラクターの造型などの方面では、同時代の同種の作品の中に比した場合、優れた点があると言うことができる。(明末清初小説選刊 [1983:224])

この思想の成熟と性格の不断の成長は、翠翹が世間の荒波にもまれた必然の結果である。この小説の編集の仕方は、この人物の心理的な発展変化の自然なロジックを把握したものだと言える。翠翹は知的な深窓の娘から、徐々に複雑な社会闘争及び社会環境に対応できるようになり、大胆な言動と慎重さ、鋭敏な思想を持つ女性闘士へと成長しているが、これこそがこの書の比較的成功的部分と言うことができる。

人によっては、『金雲翹伝』は作者の描写力が弱すぎ、翠翹がいきいきとしていないとの評価を下している。確かに、更に高度な芸術的観点から見ればこの評価はそう厳しすぎるものではない。しかしこの書を同時代の同類の小説と比較した場合には、決して最もひどい内容と言うことはできない。本書の王翠翹の人物描写を、『平山冷燕』の山黛と比較すると、山黛は生まれつきのこれといった特徴もなく、またいかなる人間性の

変化も見受けられず、まったく躍動感や生气というものが感じられない。これに対し王翠翹には性格、形象があるのみならず、性格と形象が環境に応じて不断の変化と発展を遂げており、この要因こそが、彼女が生きた人間であり、血肉のある人間であると読者に感じさせるものである。もちろん、上述の評はこの書の長所を述べたものであり、この書そのものが十分成功した作品であると言う訳ではない。しかし同期同種の作品に較べた場合には、ある程度優れていると言うことはできる。例えば『平山冷燕』は、社会的な深みや広さ、順序立て、話の筋や表現のいずれにおいても、この書に及ぶものではない。しかし魯迅氏の『中国小説史略』で言及されてからは、従来の小説史はほとんどが『平山冷燕』については評論をしているのに、『金雲翹伝』に対してはほとんど興味を示さない。（同 [1983:228]）（翻訳：増田真意子）

おわりに

青心才人『金雲翹伝』のベトナムと日本における受容をめぐる、阮攸『翹伝』と馬琴『風俗金魚伝』を中心に若干の紹介を試みた。登場人物については準備不足もあって、取り上げることができなかった。原作をはじめ、個々の作品を丹念に読み込むことが基本の作業である。これら作品のさらに掘り下げた比較紹介ができることを願ってこの作業を続けていきたい。

注

本文中の各引用については以下の書に拠った。

1. 『風俗金魚伝』関連：古典叢書 滝沢馬琴集Ⅱ第十四巻（1990）本邦書籍
2. 『翹伝』関連：竹内與之助訳（1975）
3. 『金雲翹伝』関連：文化叢書46（1971）同47（1971）青心才子『金雲翹』（上）（下）越南共和国國務卿府特責文化文化衛出版

[資料1] 阮攸『翹伝』（『金雲翹新伝』）あらすじ

時は明朝嘉靖年間、所は北京。「才」と「命」が相対立することが語られた後、王家の三人の姉弟妹、翠翹、観、翠雲が紹介される。翠翹は才色兼備の清純な飾り気のない女性である。春の一日、清明節の日に三姉弟は連れだって春の散策に出かける。彼女たちは墓守のいないかつての歌妓淡仙の墓を通りかかり、その後で金重に出会う。翠翹と金重は一言も言葉を交わしたことがなかったが、共に心が惹かれる。金重は翠翹に再会するすべをさがし、彼女の家の隣にあった空き家を借りて、月日を送る。ある日偶然、金重は翠翹が落とした釵（かんざし）を拾ったことから再会を果たし、ふたりは心の思いを語り、愛し合うようになり、妹背の契りを結ぶ。そのような時に金重は叔父の訃報を知らされ、遼陽に向かう。その後、翠

翹は不幸に見舞われる。父が突然、絹商人から讒訴される。役人はいきなり兵をつかわし、父親と息子観を捕らえ、暴行を加える。300両の金で父子を釈放すると言われる。家にはその額の財産がないため、翠翹は身売りして金を工面せざるをえなくなる。仲立ちのとりもちで翠翹は身売りし、馬監生の妾になる。だが、馬監生は女衛であったため、翠翹は秀婆が臨淄で営む青楼に身を落とす。屈辱から彼女は小刀で自殺をはかる。翠翹の決然とした行動を目にして、秀婆は元手ともうけを失うことを恐れ、急いで傷の手当てをし、自殺を思いとどまるよう諭す。翠翹は凝碧楼に住まわされるが、生活に平穩を見いだせない。ある日、楚卿がやってきて、翠翹を助け出すことができるとうそをつく。閉ざされた不安のなかで、翠翹は浅はかにも楚卿の手引きに従い、逃げ出す。翠翹は楚卿のわなにかかり、秀婆に捕らえられる。彼女は連れ戻され、残忍な仕置きを受け、接客を余儀なくされる。以来、翠翹は苦痛と苦悩のなかで汚辱の生活に身をおく。この間に、彼女は彼女に情を寄せ、妾として身請けを望む遊び人の東生に出会う。彼の故郷は無錫であったが、商売のため父親とともに臨淄に来ていた。故郷には嫉妬深い正妻宦姐がいた。思案した後、彼女は東生の誘いを受け入れ、妾になる。だが、東生は意志薄弱な人物であり、翠翹を連れ帰ってほどなく、無錫からもどった父親から拒絶され訴えられる。翠翹は役人から鞭打ちを受ける。東生の妻宦姐は嫉妬にくるう。翠翹は宦姐の奸計により、臨淄から無錫の彼女の家に連れてこられ、虐待を受ける。翠翹は悲観し、出家を願い、宦姐から観音閣での仏門生活を許される。ある日、東生と翠翹が互いの心を打ち明けていると、宦姐に現場を押さえられる。宦姐は翠翹を叱らなかつたが、翠翹は身の不安を感じる。そして、夜間に彼女は宦姐の家から逃げ、ある寺に身を寄せる。この寺の住職覚縁は当初は翠翹を住ませたが、彼女が身に携えてきた仏具が宦姐の家のものであるとわかると、連累を恐れ、寺に出入りしている薄婆を通じて、薄倅という男に翠翹をゆだねる。薄婆は秀婆と同業者であり、薄倅は甥であった。薄倅は台州に翠翹を連れて行き、男に売り渡す。結局、翠翹は再び青楼に身を置くことになる。ある時、この青楼に賊将徐海が彼女の評判を聞いて現れる。ふたりは語り合う。徐海は杭州一帯を荒らす賊であった。彼は言葉を尽くして彼女を褒め称え、妻に迎えようと決意する。徐海との年月は彼女に平穩な生活をもたらし、彼女は報恩、報怨の機会を得る。徐海は向かうところ敵なしの勢力をほこった。しかし、翠翹には悲愴の心理があったため、安泰感はなかつた。当時、総督胡宗憲は徐海討伐を命じられていたが、果たせないでいた。そこで翠翹にはたらきかけ、彼女に徐海の投降を進言させた。翠翹は信じやすい性格であったため、胡宗憲の言葉に応じた。徐海は不意をつかれ、捕らえられ、殺される。徐海は死しても直立不動の姿勢でいたが、翠翹が彼の足下にひれ伏して泣くとようやくその身が倒れた。胡宗憲は翠翹を連れ帰り、琴を弾かせ、酒席に侍らせた。彼は翠翹の美貌に魅せられたが、国の大儀をとり、彼女を留めることをせず、土地の役人にまかせた。翠翹は悲慘と屈辱のあまり、銭塘江に身を投げる。このことを三合道姑から知らされた覚縁は漁師を雇い、網を張って翠翹を救う。救出された翠翹は川辺の草庵で仏の道に従う。

一方、叔父の葬儀からもどった金重は王家が転居したことを知り、探し当てる。そして一家の不幸を知らされる。翠翹が身売りに際し、妹翠雲に託した言葉に従い、金重は翠雲と結婚する。また、王観は父の難儀の際に力を尽くしてくれた終氏の娘を娶る。科挙に及第した金重と王観は家族を伴い、それぞれの任地に赴く。その後、転勤で杭州を通りかかった際に、

偶然覚縁に出会い、翠翹の生存を知らされる。15年ぶりに金重と翠翹は再会を果たす。金重と王家の願いで翠翹は形だけではあったが金重との契りを果たす。金重は翠翹、翠雲とともに幸福な家庭を築き、栄達の道をすすむ。

[資料2] 曲亭馬琴『風俗金魚傳』あらすじ

時は室町時代末期、津の国難波村に船尾鱗蔵という金魚売りの一家があった。家族は妻水草と3人の子魚子（18歳）、鱗二郎（17歳）、乙魚（15歳）の5人であった。ある時、鱗蔵は秘蔵していた3匹の金魚のうち、殊に大きく優美な雌金魚の蘭ちゅうを金にいとめをつけない客から乞われるままに売り渡す。このことがやがて魚子に降りかかる災難の前兆となる。

次の年の春、天王寺の開帳に魚子、鱗二郎、乙魚の3人は寺詣でをする。帰りがけに、かつての名妓高津の地獄の墓を通りかかる。墓石に刻まれた辞世の句を見て、魚子は痛ましく思う。そんな時、鱗二郎の先輩学友の庭井金重郎がやってくる。ふたりの姉妹に初めて会った金重郎は、魚子の美貌に心惹かれる。一方、魚子も金重郎の男ぶりに魅力を感じる。その夜、魚子の夢枕に高津の地獄が現れ、宿世の悪報による魚子の今後の艱難を告げる。

金重郎は初めて魚子を見て以来、すっかり虜になってしまい、船尾家の東隣の空き家に移り住み、魚子との再会を待ち望む。魚子も金重郎を忘れられなくなる。木の枝にかかった魚子の簪を金重郎が取り下ろしたことが機縁でふたりは再会を果たし、妹背の契りを交わす。ある日、一家が一泊で天満の祭り見物に出かけたのを幸いに、留守居をするようになった魚子は金重郎の家を訪れ、ふたりはむつまじく語り合う。金重郎は欲情に流されるが、魚子にたしなめられる。語らいの最中に鎌倉の叔父危篤の知らせが届く。早朝金重郎は鎌倉に向かう。その日の昼過ぎ、船尾家に災難がふりかかる。一家は天満の祭り見物から帰るが、鱗蔵に泥棒仲間の嫌疑がかけられ、鱗蔵と鱗二郎が捕らえられる。返済金を工面するために魚子は身売りを決意する。120両で身請けしたのは赤穂の大尽廻四郎と名の男であったが、赤穂とは空言で実際は長門の赤間で女郎屋を営む縁起増屋の撫牛という後家の入り婿であった。何も知らない魚子を待っていたのは女郎屋であった。騙されたことを知った魚子は剃刀で自害しようとするが命を取り留める。魚子は撫牛の別荘で一ヶ月余りを過ごす。この間に、小幡此四郎という習字屋を営む男の手引きで魚子は逃げ出すが、捕らえられ引き戻される。撫牛と此四郎の謀であった。接客を余儀なくされた魚子は楓葉（もみじば）と名を改める。楓葉は赤間で評判をよぶ。やがておとずれたのが赤穂の町人錫梨東太郎であった。彼は赤間に出店をもっていて、父親東作と交替で滞在していた。赤穂には、判官加古主馬進の娘で鶴橋という妻がいた。東太郎は楓葉を身請けし、領主赤間之介種友の仲介により東作は東太郎の妾にすることを認める。鶴橋は母計井（はからい）と策略をねり、魚子を捕らえて赤穂に連れてくるよう差し向ける。薬で眠らされた魚子は船で赤穂に運ばれる。彼女は錫梨家で鶴橋と計井から虐待され、飯炊き女の扱いを受ける。魚子が死んだものとばかり思い、悲嘆にくれていた東太郎は赤間から赤穂に戻り、魚子との再会に驚くが、鶴橋と計井の策略であったことを知る。尼を願った魚子は濯泉の法名で裏手の持仏堂に住みつく。鶴橋が実家に出かけたのを幸いに東太郎と魚子は心中を語り合う。ふたりの縁に見切りをつけた東太郎は魚子に家を抜け出て、近くの尼寺に身を寄せるようすすめる。ある夜更け、魚子は持仏堂の仏具を携えて家を抜け出て、松隠庵に向かう。庵主覚縁は魚子をかかまうが、彼女の持参した仏

具が錫梨家のものであると、人から知らされる。魚子の身を危ぶみ、覚縁は寺に出入りしている蚊摺取の架勢木という女性に魚子をあずける。彼女は、鎌倉より商売で赤穂に出向いている足懸屋鴟八に魚子を引き合わせる。鴟八は魚子を鎌倉に連れて行き、玄九郎という女衞に魚子を売り渡す。結局、魚子は女郎屋を営む浮世屋丈六のもとに売られ、二度目の妓女勤めを余儀なくされる。ここに現れたのが、氏がみ大尽で、気に入られた魚子は身請けされ、鳴立澤という場所にある家で生活を始める。やがて彼は名家の末裔で下野太郎氏武であることを魚子に告げる。氏武は戦に出て行くが、戦功をあげ、兵を遣わして魚子を鎌倉に迎える。魚子はここで平穏な生活を得る。この間、彼の威力を頼りに、魚子は報恩、報怨を果たす。

管領扇谷朝興は氏武を追討すべく、手下の風間九郎を間諜として氏武陣営に送り込み、様子をさぐらせていた。慢心から酒三昧の日々を送っていた氏武は用心を怠り、朝興の軍の不意打ちを受け、彼は討ち死にする。手柄を狙った布留辯彌は氏武の首を打ち落とす。朝興は辯彌に褒美として魚子を与える。辯彌が魚子を伴い、船で故郷陸奥（みちのく）に向かう際、銚子の浜にさしかかったところで魚子は刀で辯彌の首を刎ねた後、海に身を投げる。

赤穂から諸国を行脚して伊丹にきた覚縁はここに庵を結んでいた。覚縁はひとりの信心厚い漁師にしかじかの場所に網を張って待つよう告げる。魚子はその網にかかり引き上げられ、覚縁の庵に運ばれ、手当を受け、息を吹き返す。彼女は覚縁の松隠庵で写経の日々を送り、やがて得度し、妙龍の法名を名のる。

一方、危篤の叔父を見舞うため鎌倉に出向いた金重郎は、もちなおした叔父に引き留められる。金重郎はここで3年あまりを過ごし、武術を習い、達人の腕前になる。やがて叔父が亡くなり、金重郎は後始末を終えて故郷難波に帰ろうとした矢先、父の病氣重しの飛脚がくる。難波の親元にもどって二ヶ月ほどで父親がみまかる。船尾家では鱈二郎が魚子の行方を探すが、手がかりを得られない。この間彼も武術を習い、上達する。家族は金重郎の帰郷を伝え聞くが、喪に服しているため会うことができない。物忌みが明けた金重郎は船尾家を訪れると、事の次第を知らされる。鱈蔵は魚子が身売りに際し残した言葉を伝え、妹乙魚との結婚を懇請する。金重郎と乙魚は庄官池住藻太夫の媒酌で婚礼を挙げる。後に鱈二郎は藻太夫の娘藻の花を妻とする。金重郎は結婚して4年目の秋に鱈二郎とともに仕官の機会をもとめて京にのぼる。ある日、將軍義晴公の子輝若丸の危難を救ったふたりは家臣として召し抱えられることになる。義晴公はふたりにお礼参りに潮来明神に代理で参拝に行くよう命じる。潮来に来たふたりは参拝を終えて、銚子の漁の様子を一見するため、あちこち見物する。途中村雨に降られ、雨宿りに道の辺の庵に身を寄せる。期せずして、ふたりはこの庵に住む魚子と再会する。覚縁は行脚のためすでに庵を出ていた。金重郎と鱈二郎は魚子が一日遅れて難波に帰れるよう手配して、先に帰る。供人に伴われて難波村に帰った魚子は家族と10年ぶりの再会を果たす。金重郎と鱈二郎は家族を伴い、都に上り、仕官する。魚子が世俗の家に同居することを厭ったために、金重郎と鱈二郎は相談の上、真葛原に彼女のための草庵をつくる。ある夜、魚子は夢のなかで覚縁から、前身在むねつ地の金魚で何百年間も同類の小魚を食い、因果の道理を知らなかったために、船尾氏の娘として生まれ変わり、その苦難を受けたが、罪障を償ったので来世は成仏すると告げられる。覚縁は観世音の権化であったことを魚子は覚る。

【参考文献】

- 麻生磯次（1946）『江戸文学と支那文学』三省堂
- 石崎又造（1940）『近世日本に於ける支那俗語文学史』弘文堂書房
- 川本邦衛（1967）『ベトナムの詩と歴史』文藝春秋
- 神田正行（2011）『馬琴と書物—伝奇世界の底流—』八木書店
- 竹内與之助訳（1975）阮攸『金雲翹』講談社
- 畠中敏郎（1960）「『金雲翹』考」比較文学第三卷
- 磯部祐子（2003）「中国才子佳人小説の影響—馬琴の場合—」高岡短期大学紀要第18巻
- 青心才人編次『金雲翹傳』独立行政法人国立公文書館蔵
- 曲亭馬琴稿本『風俗金魚傳』財団法人 東洋文庫蔵
- 曲亭馬琴『風俗金魚傳』（国立国会図書館 近代デジタルライブラリー）自由閣、1886年
- 古典叢書 滝沢馬琴集Ⅱ 第十四巻（1990）本邦書籍
- 阮攸『金雲翹新傳』河内、観文堂蔵板、啓定癸亥（1923）
- 文化叢書46（1971）青心才子『金雲翹』（上）越南共和国國務卿府特責文化文化衛出版、サイゴン〈手写版『金雲翹』とグエン・ディン・ジエムによるベトナム語訳〉
- 文化叢書47（1971）青心才子『金雲翹』（下）同上
- ドー・ドゥック・ヒエウ他編（1984）『文学辞典』（第2巻）社会科学出版社、ハノイ〈ベトナム語〉
- 明末清初小説選刊（1983）青心才人編次『金雲翹伝』春風文芸出版社、瀋陽

Nguyen Du and Bakin

: A comparison between two works

Kenichi KAWAGUCHI

Tokyo University of Foreign Studies

【keyword】 Nguyen Du, Kyokutei Bakin, *Tale of Kieu*, *Huzoku Kingyo Den*
(*Popular Story of Kinjuro and Uoko*)

Nguyen Du, a man of letters in Vietnam, wrote *New Tale of Kim Van Kieu* (or *Tale of Kieu*) in the late 18th or the early 19th century.

It was written in the six-eight-word distich metre, which is one of traditional literary forms in Vietnam. *Tale of Kieu* is highly evaluated as his masterpiece, at the same time is also considered one of the greatest works in the history of Vietnamese literature. But it was not his original work but a kind of adaptation novel based on *Jin Yun Qiao Zhuan* by Qing Xin Cai Ren, an unidentified Chinese writer.

In Edo period of Japan, *Jin Yun Qiao Zhuan* was brought from China, and was translated into Japanese by Nishida Korenori in 1763, titled as *Popular Story of Jin Qiao*. Later than that, Bakin wrote *Huzoku Kingyo Den*, that is, *Popular Story of Kinjuro and Uoko*.

This report aims at giving some consideration in the above-mentioned works of Nguyen Du and Bakin.

Briefly, *Tale of Kieu* by Nguyen Du could be evaluated to be a work with a high artistic and literary value found in such three points as the graceful style of traditional Vietnamese narrative, the affluence of various images brought forth by poem and the expression of Nguyen Du's thought on life. As for *Huzoku Kingyo Den*, it also could be said to be an excellent work written by Bakin with his high literary skill. But the readers nowadays may feel something wanting in this work because they find few expression of his philosophy of life.